

第4表 屠体成績

区分	A 区						B 区		
	I			II			20%区	40%区	60%区
	対照区	20%区	40%区	対照区	20%区	40%区			
屠殺時体重 (Kg)	86.1	86.7	87.6	85.9	86.2	87.4	86.2	85.8	85.5
冷屠体重 (Kg)	62.4	64.1	63.9	63.8	63.6	65.2	63.5	63.1	63.3
と肉歩留 (%)	71.5	74.0	71.3	74.3	73.8	74.6	73.8	73.6	74.1
背腰長 (II) (cm)	69.7	69.0	69.8	65.9	65.4	68.5	68.9	69.1	68.3
屠体幅 (cm)	32.0	32.2	32.7	33.5	34.8	33.6	33.4	34.5	34.0
ロース	長さ (cm)	52.8	52.4	52.2	50.0	50.2	52.0	53.1	52.6
	太さ (cm)	16.4	14.7	13.8	16.5	15.6	15.9	15.4	14.4
背脂肪層の厚さ (cm)	2.4	2.6	2.7	2.7	2.6	2.9	2.9	2.9	3.4
ハムの割合 (%)	32.8	32.9	31.8	33.1	32.3	32.3	33.7	32.1	31.1
出荷枝肉重量 (Kg)	57.4	59.0	58.8	58.7	58.5	60.0	58.5	58.1	58.2
単価 (円)	374	371	361	346	351	344	308	308	300

れなかったが、特に40%区は最もすぐれ、60%区はわずかに劣った。屠体の成績についても著しい差は認められなかったが、60%区は背脂肪層の厚さにお

いて、厚脂の傾向がみられた。したがって屠米の利用は40%までが可能と考えられる。60%については、今後さらに検討を要する問題が残されている。

雌雄別飼いによるブロイラー育成試験

沼田 稔 比古

(福島県養鶏試)

1 ま え が き

ブロイラー用ひなの育成は、従来雌雄鑑別しないで育成されているが、ブロイラーの雌雄別飼いによる育成成績については、すでに昭和42年、試験成績報告第4号によって報告した。それによると雄は雌より発育、飼料要求率、経済性ともにすぐれたが、枝肉歩留

でわずかに劣る成績を示した。しかし、この試験では雌、雄混飼との比較を行なわなかったため、今回さらに雌雄混飼区を設け、これらの比較試験を実施した。

2 試 験 方 法

- 1 試験区分および期間(第1表)
- 2 飼料の給与期間および成分(第2表)

第1表 試験区分および試験期間

試験	供試ひな	区	性	供試羽数	床面積	試験期間	試験	供試ひな	区	性	供試羽数	床面積	試験期間
	I	ピルチ	別飼区	♂	148	16.5 m ²		44. 9.10~ 1.18 70日間	II	大型WR	別飼区	♂	122
♀				152	16.5	♀	147					16.5	
計				300		計	269						
混飼区			♂	151	33.0	♂	125				33.0		
			♀	153		♀	144						
			計	304		計	269						

第2表 飼料の給与期間および成分

	飼料	給与期間	飼料組成				養分総量
			粗蛋白	粗脂肪	粗繊維	粗灰分	
試 I	前期期	28日令まで	22.7%	4.5%	3.2%	5.5%	7.6
	後期	29日令以降	19.8	6.9	3.4	5.1	8.0
試 II	前期	28日令まで	20.0	3.0	5.0	8.0	6.9
	後期	29日令以降	17.0	3.0	5.0	8.0	6.8

3 飼養管理

- (1) ひなの育成は同一場所で行なった。
- (2) 飼料は不断給与とし、飼料の切替えは即日切替えとした。
- (3) 衛生管理は、28日令に鶏痘とニューカッスル予防注射を実施した。

(1) 育成率は、別飼区93.4%、混飼区93.9%で差は0.6%でほとんどなかった。

(2) 体重は、8週令で別飼区が混飼区より57g大きく、10週令では101gの差があり、斉一性は、10週令変動係数でみると9.4%以下でバラツキは各区雌雄とも少なかった。しかし、別飼区の雄と雌の差は578g、同じく混飼区の差が490gで、別飼いは雄の発育が良い。

3 試験結果

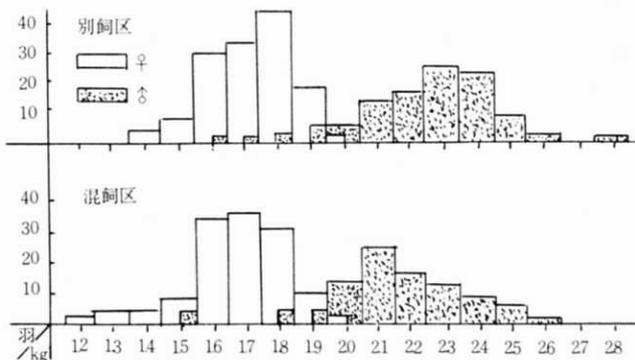
1 育成率および発育体重(第3表)

2 10週令体重度数分布(第1, 2図)

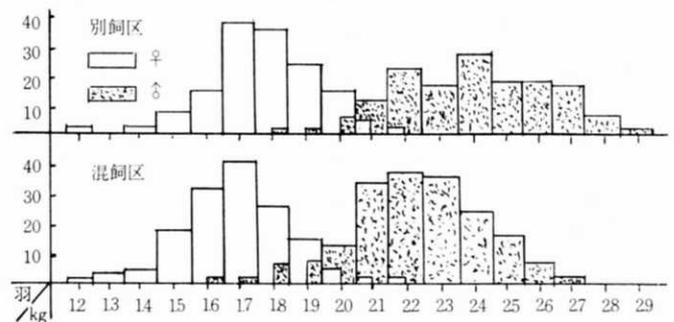
第3表 育成率および体重

(試験I・II)

区	項目	性	10週令育成率	8週令体重		10週令体重	
				平均値±標準偏差	変動係数	平均値±標準偏差	変動係数
別飼区	♂		91.4%	1,666 ± 151.7g	9.1	2,368 ± 209.0g	8.8
	♀		95.3	1,294 ± 117.8	9.1	1,790 ± 144.4	8.1
	平均		93.4	1,480 ± 134.9	9.1	2,079 ± 177.1	8.5
混飼区	♂		91.8	1,573 ± 148.7	9.5	2,223 ± 208.7	9.4
	♀		96.0	1,273 ± 121.6	9.6	1,733 ± 150.6	8.7
	平均		93.9	1,423 ± 135.0	9.5	1,978 ± 176.7	8.9
混飼区 別飼区	♂		-0.4	93	-0.4	145	-0.6
	♀		-0.7	21	-0.5	57	-0.6
	平均		-0.6	57	-0.4	101	-0.7



第1図 10週令体重分布(試験I)



第2図 10週令体重分布(試験II)

3 飼料の利用性 (第4表)

(1) 飼料消費量は、別飼区が混飼区よりやや多いが、要求率でみると8週令、10週令とも別飼区が若干低くなっており、混飼区より有利なことを示している。

(2) 別飼区の要求率を比較すると10週令時で雄2.52、雌2.71で雄が飼料の利用性にまさっていることがわかる。

4 粗収益 (1羽当り, 10週令)

経済性は粗収益をもって算出したが、別飼いした方が平均で10.2円多く、ブロイラー育成の場合、雌雄別飼いが有利であることを示している。

第4表 飼料の利用性 (試験I・II)

区	項目 性	飼料消費量 (10週令1羽当り)	飼料要求率	
			8週令	10週令
別飼区	♂	5,932 ^g	2.30	2.52
	♀	4,829	2.45	2.71
	平均	5,381	2.38	2.62
混飼区	♂ +	5,226	2.39	2.64
別飼区-混飼区		155	-0.01	-0.02

第5表 粗収益

(試験I・II)

区	項目 性	収入		支出					粗収益
		ブロイラー売上代 円	飼料		ひな代 円	鑑別代 円	へい死 ひな代 円	小計 円	
			前期 円	後期 円					
別飼区	♂	448.7	46.5	218.5	70	2	6.2	343.2	105.5
	♀	340.1	42.5	173.0	70	2	3.0	290.5	49.6
	平均	394.4	44.5	195.8	70	2	4.6	316.9	77.5
混飼区	♂ +	375.9	41.5	191.3	70	0	5.4	308.5	67.4
別飼区-混飼区		18.5						8.4	10.2

注. 1) 飼料単価: 前期Kg当り47円, 後期42円
2) ブロイラー単価: 生体Kg当り190円として算出した

4 要 約

雌雄別飼した区と混飼した区を設け、ブロイラー用ひなを育成し、その成績を調査したところ別飼区は、発育、飼料要求率、経済性ともにすぐれ、混飼区より

有利な結果を得た。特に別飼いによって雄の発育成績がよくなることから考えて、雄、雌それぞれに適した管理方法について検討を加えることにより別飼いの成績はさらによくなる可能性があるものと思われる。

鶏の屋外ケージ飼育に関する試験

和田清治
(青森県養鶏試)

1 ま え が き

施設費の低減を図り、かつ、またマレック病等のまん延防止によるヒナの育成率の向上を図ることを目的とし、屋外ケージ飼育および簡易養鶏施設における飼育管理技術の確立について検討したので、その概要(育成期成績)を報告する。

2 試 験 方 法

1 供試鶏および試験方法

供試鶏は、酷暑期餌付したヒナは昭和45年1月26日、温暖期餌付のヒナは昭和45年6月1日に当場でふ化したロードホーン雌を用いた。試験方法は第1表に示すとおりである。